

ドーパミンない行動異常のマウス

## 統合失調症薬が効果

都医学総研

東京都医学総合研究所は神経伝達物質「ドーパミン」がなく行動異常を起こすマウスに、統合失調症の治療薬が効くことを実験で確かめた。統合

失調症はドーパミンの働きが強すぎたり弱すぎたりすることで幻覚や妄想などの症状が現れるとの見方がある。マウスはドーパミン量がほとんどな

い患者に状態が似ている可能性があるという。ドーパミンは学習や運動機能、快感を得るなどさまざまな働きがある。都医学総研の池田和隆参

事研究員らは脳内でドーパミンを作れないマウスを使い実験した。ドーパミンのもととなる物質をマウスに投与し、脳内のドーパミン量を調節した。少量ある状態だとマウスはほとんど動かなくなり、完全に動かなくなると動きが活発になった。

ドーパミンがなく活発に動くマウスに統合失調症薬「クロザピン」を与えると、動きが治まった。一方、「ハロペリドール」という薬では動きが活発なままだった。マウスで動きが治まれば、薬効があったとみなせるという。

統合失調症患者の多くはハロペリドールを飲むと症状が和らぐ。この薬よりもクロザピンが効く患者もいるが、詳細はよく分かっていない。

研究チームはクロザピンが効く患者の脳内ではドーパミン量がほとんどなくなっているかもしれないとみている。治療薬選びなどに役立つ可能性があり、臨床医と共同で解明を目指す考えだ。